



1 はじめに

私は現在、63歳である。父親は私が34歳の時に心筋梗塞で亡くなった。配偶者は42歳の時に家庭内の事故で亡くなり、母親も48歳のときに心筋梗塞で亡くなっている。50歳前に、私は3つの葬儀で喪主を務めた。おかげでこの先、自らの身内の介護を担う可能性は極めて少ない。にもかかわらず、介護あるいは介護福祉に関しては、社会福祉の教員としてだけでなく、様々な形で関わってきている。

まずは、社会福祉の教員としての立場の延長線での話である。所属する大学の社会福祉学科には介護コースがあり、学科の責任者としての立場から介護コースの運営に関わることになる。社会福祉学科の学科長として、介護コースを希望する学生の選考、幾つかの実習報告会への参加という形での関わりである。また、大学の近隣の自治体から、介護保険事業計画の策定委員会のとりまとめを依頼されることがある。横須賀市で2期、葉山町でも2期、計画の策定に関わらせていただいた。さらに、学生の卒業論文の指導、修士論文の指導でも介護福祉に関連したテーマでの指導を求められることがある。介護という援助における利用者と援助者の関係性をテーマにした卒業論文、異文化を持つ高齢者の援助に関する研究や介護におけるリハビリテーションの教育に関する修士論文などがそれである。

介護福祉士国家試験に関しても、ここ9年ほどかかわってきた。特にこの6年は国家試験委員会の副委員長という立場で、介護福祉士国家試験問題の作成に携わってきた。経済連携協定（通称 EPA）への対応として、ここ何年か、国家試験問題の出題内容の適正化に関わるとともに、試験の在り方そのものについて、深く考えさせられることが続いている。

もう一つ、娘のことを書く必要がある。20年ほど前に亡くなった妻との間には二人の子供がいる。その二人の子供は、上が男で下が娘である。この娘は、母親が早くなくなったことも関係してか、美術系の高校にいたのだが大学では哲学（正確には臨床哲学または、現代倫理学）を学び、大学院博士前期課程ではスピリチュアルケア、グリーフケア等につ

いて臨床哲学の立ち位置からを研究した。その後、大学に附置されたグリーンケア研究所で RA を 1 年務めた後、介護職員初任者研修を受講して、現在は介護の現場で働いている。彼女には彼女の思いがあつての進路選択ではあるが、この後、介護福祉の分野で彼女がどのように成長していくのか、楽しみであるとともに、気にかかるところでもある。

このような幾つかのことがあり、本人の望むところとは関係なく、私は介護あるいは介護福祉と遠からぬ縁ができてしまった。このような縁を頼りに介護福祉を巡ってこれまで考えてきたことを、今回からとりとめもなく書き連ねていきたいと思う。

2 日本と韓国の間で考えたこと

2010 年度からの 3 年間、大学院で指導した学生に韓国出身の朴ソンヘがいる。彼女は、韓国・釜山特別市にある私立大学、慶星大学（韓国では大学校）の社会福祉学科を卒業した。成績が優秀なことから 3 年半で大学を卒業することになり、その後、釜山市内の社会福祉法人に 1 年半ほど勤務してから、日本への留学を希望して東京の日本語学校に通ったというキャリアである。まだ日本語が不自由な時点で大学院を受験したが不合格になり、私の研究室で研究生として 1 年間勉強し、翌年の 2009 年 9 月に大学院に合格した。

大学教員になった 2006 年以降、私の隣の研究室に 10 カ月ほどサバティカルで来ていた朴貞蘭氏（韓国金海市にある仁済大学社会福祉学科の教員で高齢者福祉が専門）が、2007 年 1 月に韓国へ戻ったことから、私は折に触れ釜山市や金海市の福祉現場を定期的に見学させていただくようになっていた。2008 年の夏、朴貞蘭氏が日本での研究のついでに大学に立ち寄ってくれたのは、朴ソンヘのことを彼女の恩師である慶星大学の金教授（社会福祉政策が専門）から依頼されたからであろう。私の所属する神奈川県立保健福祉大学の大学院の受験を朴ソンヘに勧めるとともに、指導教員の候補を探るための来校であった。若干の経緯はあるが、朴貞蘭氏がサバティカルの際、隣の研究室にいて顔見知りであったこともあり、私が指導することとなり、2008 年 9 月に 1 回目の大学院受験をした。しかし、この時点ではまだ日本語の修得が十分ではなく、小論文も水準には達していなかった。このようなことから、2009 年度は、私の研究室で研究生として大学院進学準備をすることになった。学部の社会福祉学科の専門科目を徴候するとともに小論文の課題を出しそれを添削するというのを繰り返した。また、彼女は、朴貞蘭の紹介を受けて横須賀市内の社会福祉法人でボランティアを始めた。翌年の 2009 年 9 月の大学院入試では、日本人の学生に交じり恥ずかしくない成績で合格する。朴ソンヘの日本語を修得する早さには驚かされるばかりだった。

大学院に合格が決まったあと、入学直前の 2010 年 2 月から 3 月にかけて、私は朴ソンヘの案内で韓国、釜山市内の社会福祉法人等を見学をした。彼女が大学を卒業してしばらく務めていた社会福祉法人が経営する総合社会福祉館と小規模な老人ホーム、さらに彼女の大学の先輩が管理職をしている別法人の老人ホームを訪ねた。

韓国の社会福祉は、1990 年代の民主化政権のもと、1995 年の IMF 通貨危機を乗り切る

過程で発展してきたといわれる。1950年からの朝鮮戦争は、アメリカの軍事介入により38度線での停戦という形で区切りを迎え、朝鮮半島の南側に、現在の大韓民国が成立する。アメリカの軍事力に守られた大韓民国（＝韓国）は、世界の最底辺国の一つとして出発する。北の攻撃にあい疲弊しきった土地に韓国が成立したとき、アメリカからの直輸入で社会福祉が導入される。一方で、日本が朝鮮半島を植民地としていた時期に、日本の社会事業が朝鮮半島に進出している。このあたりのことは、朴貞蘭の『韓国社会事業史』（朴貞蘭2007『韓国社会福祉事業史』ミネルヴァ書房）に詳しい。恐らく多くの韓国人は認めがららないのであろうが、植民地時代に日本が持ち込んだ社会事業とアメリカ直輸入の社会福祉が混ざった形で発展してきたという状況にあると考えられる。

その韓国は、近年、日本の社会福祉制度を熱心に研究しながらこの20年余りの間に自国の社会福祉の枠組みを構築してきたといえる。2008年7月には、高齢化率7%の段階であるにもかかわらず、日本の介護保険制度を参考にして長期療養保護保険制度をスタートさせている。韓国の高齢者福祉はそうした中で発展してきているのである。

長期療養保護保険がスタートしてから2年弱の2010年春先の段階で、私が韓国で見た高齢者福祉施設は、日本の介護保険スタート時点よりはるかに昔の運営形態であった。利用者である女性は皆が洗髪しやすい短い髪型であり、施設の中では同じパジャマを着ていた。施設の中で車イスはほとんど使用されておらず、居室にはベッドもなく、日本より狭い居室で3人が生活しているところを見学した。この時点で私は、韓国の高齢者福祉が日本と比較して20年以上遅れていると感じられ、1990年代の民主化後、あわてて社会福祉制度を整えてきた国なのだと印象が強かった。

たびたび韓国に行き、高齢者施設を見て行くうちに、幾つかのことに気付かされる。韓国も高齢者施設には女性が多い。その女性たちが、座布団を囲んで花札をしている場面に何度か出くわした。日本にいて高齢者施設を訪ねても花札をしている場面に出合ったことはない。この花札という遊びに何か特別な意味があるのではないかと感じた。また、見学に行くとき概ねいつも高齢の女性利用者たちが親しげに近寄ってきてくれる。人間関係における距離感が日本とは違う印象があった。

釜山から車で1時間ほどのところに慶州がある。屋根のない博物館とも称せられるところで、朝鮮半島の千年の都であった新羅の中心都市があったところである。この慶州は、韓国仏教の頂点にある仏国寺や、国宝となっている石窟庵の石仏、新羅王朝の歴代の王の古墳など有名な史跡があるのだが、それとは別に慶州ナザレ園という高齢者福祉施設がある。この施設は、韓国の社会福祉法人が運営する日本人のための施設である。

韓国の介護保険制度である長期療養保険は、韓国国民が対象である。日本人などの外国人はその対象外となっている。しかし、朝鮮半島にはかつて日本が半島を植民地にしたこと、内鮮一体として朝鮮半島と日本を一体化する同化政策により、多くの日本人が渡り、その中には半島出身の男性と結婚した女性も多くいた。そうした女性たちが、その後

すべて幸福な生活ができたとは限らない。むしろ、戦後の日韓関係の中で、日本人であることを隠しながらひっそりと半島で暮らしてきた人が多かったのではないか。結婚して子供が生まれ、家族が形成されて行く過程で、第二次世界大戦が終わり 1950 年代初めには朝鮮戦争があった中で、以降今日までの 70 年間、韓国と日本との関係は、困難な環境にある時期の方が長かった。そのようなひっそりと暮らしてきた日本女性たちの中に生活に困っている人がいることを知った韓国のキリスト教関係者が、1970 年代に立ち上げた老人ホームが慶州ナザレ園である。

私は、これまで慶州ナザレ園を 3 回ほど訪問している。1 回目は 2010 年の春、2 回目は 2011 年の秋、3 回目は 2015 年の春である。2010 年の春に、朴ソンへと一緒に訪問した際、私達を出迎えてくれたのは慶州ナザレ園の園長である宋美虎氏であった。眼鏡をかけ、広い額が見える髪型で 50 代後半の私と同年輩であろう宋園長は、ナザレ園のできた経緯を日本で紹介したテレビ番組の録画ビデオを私たちに見せた後、施設の案内をしてくれた。

窓が大きく、春の日差しが差し込み明るく暖かい廊下を歩いて行くと、中ほどに丸い小さなテーブルとそれを取り囲むイスが置かれていて、そこで 3 人のおばあさんたちが花札をしていた。私たちはそこで立ち止まり、しばらくの間、おばあさんたちとおしゃべりをし、写真を撮った。3 人のおばあさんは、皆、80 歳を超えていたが、私が日本から来たことを伝えると、出身地などを話してくれたように思う。そのあと、奥にある利用者の居室や NHK の画像が流れている共用のリビングルームなどを見学したが、廊下で出会った 3 人のおばあさんと花札の印象が特に強く残った。

2011 年秋には、社会福祉学科の同僚教員を誘ってナザレ園を再訪した。最初の訪問とほぼ同じ午前中の 11 時前に訪問したのだが、驚くことに 3 人のおばあさんたちはまったく同じ場所、同じ位置取りで花札をしていた。しばらくおしゃべりをしたのち、また写真を撮り、握手をして別れた。日本に戻って、2 階の訪問のときの様子を、写真を交えながら話す機会が何度かあり、話すたびに 3 人のおばあさんが花札をしていることの意味を考えさせられた。そしてまた 3 人のおばあさんが、その後どうしているのか気になった。

2015 年の春、別の大学の招きでゼミ生を連れて韓国を訪問する際、1 日時間を取り、3 度目となる慶州ナザレ園への訪問をした。連れて行った三人のゼミ生は女子大生ばかりで、それだけでとても賑やかな旅であった。ナザレ園に行くと、おばあさんたちは三度目も同じ場所で花札をしていた。よく見ると、どうやら一人は前の 2 回の方とは入れ替わっている。もしかすると前回の訪問からの 3 年半の間に亡くなられたのかもしれない。隣のテーブルにも 4 名のおばあさんたちがいて、連れていった女子学生たちとにぎやかなおしゃべりの花が咲いた。自分達が朝鮮半島に来た時と同じくらいの年齢にある若い日本人女子大生が尋ねてきたことで、おばあさんたちは心躍ったのであろう。

このときも私達を案内してくれたのは宋園長だった。利用者のおばあさんたちの認知症が進み介護に苦勞していること、ナザレ園を開設した金牧師の志を何とか遂げるため努力していることを、宋園長は私と学生たちに話してくれた。

朴ソンへに様々なことをお願いするなかで、韓国・釜山周辺の社会福祉の現場を見て歩くことだけでなく、彼女の家族等とも交流をするようになっていった。私が金海国際空港につくと、到着ロビーに彼女のご両親が迎えに来ていたり、義理の兄がホテルまでの送迎を受け持ってくれたり、様々なサポートをしてくれた。日本に帰るときにも、見送りが可能なときは車で1時間近くかかるにもかかわらず、お土産をもって金海国際空港まで見送りに来ていただいた。外国の人と友人になっても、日本人である我々にはとてもできそうにない対応である。

韓国に行って知り合いが次第に増えて行く中で、やがて様々なことが一つの形をなしていく。「情」と「ウリ」という言葉によって示される人間関係の濃密さの意味に気付かされていく。(以下、次回へ)